とびきり不埒なロンドン史

ジョン・ファーマン著　尾崎　寔（女子大学学芸学部教授）**訳**

筑摩書房
2,200円

ロンドン下町は大阪ミナミ?

やはりイギリスには感服してしまう。王室も政治家も庶民も外国人もすべてを笑いのネタにしてしまう不敵な度胸、そこには混濁した人間性への愛情とのびやかな屈強さが感じとれる。

「よそゆき」のロンドン史には絶対に登場しない事件や人物伝を目にすると、今すぐ出かけて事件現場を探してみたくなる。著者によるイラストも必見だ。

本書はまず末尾の「対談、尾崎寔×小林章夫」から読み始めよう。イギリス通として随一のお二人の対談である。

「お構いなしにズケズケ書いてしまう」イギリス流ブラック・ユーモア、それをサラリと受け流す鷹揚な土壌、繁栄の時も貧困の時も街の下支えとなった庶民の底力とコックニーの妙味、よそ者文化に実に寛容なコスモポリタンの街ロンドン、こうした本書エッセンスが淀みなく軽快に紹介されている。

「ロンドンの匂いがしますね。猥雑で結構蒸し暑いような。だから関西に住んでいる人が訳すほうが面白い」なるほど。「生粋のロンドン子は大阪人」、だから「ロンドン下町は大阪ミナミ」、これが対談のオチである。

「フラチな」と銘打った本書ロンドン史は、動物イジメや娯楽としての処刑見物など、野蛮も残酷さも哀しさもすべてを同等にさばいていく著者ファーマンのロンドン子魂へのあふれんばかりの自負を宣言した作品である。原作の空気を伝える洒落っ気ある翻訳文も実に楽しい。

風間末起子（女子大学現代社会学部教授）

グローバリゼーションと市民社会ー国民国家は超えられるか

望田幸男（大学文学部教授）**ほか編　大野節夫**（大学経済学部教授）**ほか執筆**

文理閣
3,200円

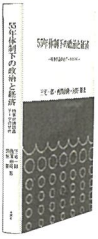
グローバリゼーションと国民国家のゆくえは、いま最も熱いテーマの一つである。本書は専門を異にする九人の執筆者が、このテーマを各々の領域から論じたものである。

第一部の諸論文は、歴史学の立場から国民国家を検討する視座を提供している。昨今の国民国家批判にみられる問題点が整理され、学問的批判のスタンスが確立されている。ここで、近代の思想的遺産が評価されるとともに、国民国家の抑圧的統合的機能と各国の特殊性が明らかになっている。

第二部の諸論文は、政治学・経済学・哲学の各分野からなる。ここで共有されているのは、市場と国家に対して自律的な社会をいかに構想するかという問いである。グローバリゼーションを安易に受容、または拒絶するのではなく、不可避の潮流と認識しつつ、それに国家の枠にとらわれない社会をつくりだす積極的な契機を見出していることが特徴といえよう。グローバリゼーションの流れの中に近代国民国家の解放的理念を生かしつつ、その流れがもたらすであろう抑圧に対しては拮抗しうるような市民社会像が展望されている。各国の特殊性を保持しつつ普遍性を帯びた社会をいかに編み上げていくかが課題なのである。

最後には、三月に逝去された田畑茂二郎先生へのインタビューが収められている。

亀高　康弘（大学大学院文学研究科）



木鐸社
3,500円

55年体制下の政治と経済
―時事世論調査データの分析―

西澤由隆（大学法学部教授）**ほか著**

本書は、一九五五年から九三年にいたる、いわゆる「55年体制」の特質を、有権者の政治意識の側面から明らかにしようとした研究書である。「55年体制」とは、ある意味ではエリートレベルにおいて成立した政治的枠組みであったが、そうした枠組みを有権者がどのように認識していたのか、またその条件のもとでどのような行動をとったのか、本書はこれを解明しようとしたのである。

具体的には、有権者における体制選択の選好、「55年体制」のもとで重要な政治的亀裂をなした防衛・外交政策についてのイデオロギー評価、さらに経済に対する評価などが、とりあげられている。これらは、従来からよく研究されてきたテーマであるようにも思われよう。しかし、実はみなこれまで見落とされてきたか、あるいは軽視されてきたものばかりなのである。

これらを通じて著者たちが着目した点は、一言でいえば、有権者のなかにいわゆる「業績評価モデル」による投票行動が浸透してきたのではないか、ということである。むろん業績評価といってもストレートに現われるわけでない。内閣支持率の変動など複雑な形をとる。しかし、いずれにせよ有権者は案外成熟しており、かつ自主的に判断をくだしている。それゆえ、政治の世界はこれまで以上に有権者の厳しい目にさらされるようになった。われわれはそうした時代に生きるようになった。本書を読むと、あらためてそうした感慨に打たれるのである。

梅津　實（大学法学部教授）

コモンズ
2,200円

公共を支える民

寄本勝美編著
市川喜崇（大学法学部助教授）**ほか執筆**

これまで日本で「公共」とは、主に政府行政が担うものとされてきた。しかし近年では、NPOやボランティアによる「公共」的な活動が注目を集めている。つまり「公共」の担い手が多様にあって、市民生活を支えていることが再発見されている。

本書はそうした観点から、地方自治体における諸活動について、具体的に市民と行政の関係を中心に検討したものである。英米の事例や、環境基本計画、地方議会、清掃行政、高齢者福祉や障害者問題、スポーツ事業、そして農業まで、幅広く現場の視点で市民と行政の関係について興味深い分析を行っている。

市川助教授の執筆による「分権改革と二一世紀の地方自治」は、本書の第一章を飾るにふさわしく、これからの地域社会を見通す上で避けてとおれない地方分権整備法に至った背景と、改革の内容を方向付けたメカニズムを明らかにした上で、次の課題として公共事業の分権、税財源の分権、そして地方自治基本法の必要性を説く。

公共サービスに関わる自治体行政と市民を巡る市川論文の重要な論点は、分権改革後の地域社会像である。そこではポスト福祉国家体制の中で、NPOの叢生や協働論の流行に見られるように、市民と行政とが多様な協力形態をとりながら地域を支えて行く姿である。もちろんそれは自治本来の営みでなければならないことは言うまでもない。

新川達郎（大学総合政策科学研究科教授）

経済学論集Ⅰ『ケインズ経済学と失業・所得分配』、Ⅱ『経済成長と金融動機・利子・利潤』

渡辺　弘（大学名誉教授）著

晃洋書房
3,000円
4,000円

これらの書物は、この三月まで本学で研究と教育に大きな足跡を残された渡辺弘名誉教授が、四十六年の研究成果の中から主要な論文を中心に、二冊の経済学論集に纏められたものである。

マクロとミクロの経済理論は車の両輪のように構成され現実を説明することが望まれるが、実際それは極めて難しい。その困難な作業にあえて挑戦し、少しでも乗り心地の良い車を作るべく、両理論相互の基礎付けを目指した著者の意図は大きな成功を収めており、読者は読み進むにつれ直接その快適になった乗り心地を味わうことができる。

例えば論集Ⅰの第四章「有効需要の原理と所得分配」は、それを如実に示しており、それに先立つ三つの章は、その理解を容易にするべく配列されている。また、これに続く第五章は、非自発的失業の原因が高賃金ではなく総需要不足にあることを明らかにしているが、その際にもミクロ理論のマクロ的基礎付けが有効に用いられ、さらにニュー・ケインジアンの効率賃金仮説がマクロの説明において失敗に終わることも示されている。

論集Ⅱは、論集Ⅰでは論じられなかった経済の貨幣的側面の動学的観点からの分析であり、これまで論じられることが少なかったケインズの金融動機に基づく利子論や、ケインズ派と新古典派の成長理論が中心である。

ケインズ経済学に軸足をおいた著者の一貫した視点が、論集全体に大きな纏りを与えていることを、最後に述べておきたい。

清川義友（大学経済学部教授）

ゲルハルト・リヒター／オイル・オン・フォト、ひとつの基本モデル

清水　穣（大学言語文化教育研究センター助教授）著

ワコウ・ワークス・オブ・アート
1,815円（税ほか込）

古池や蛙飛び込む水の音。マザーグース並みの知名度を誇るこの俳句の意味を考えることが、現代絵画には門外漢でしかないわれわれに、ゲルハルト・リヒター理解へのひとつの入門の道を開いてくれるかもしれない。

なぜなら、この句によればそれまでまったくの透明性、あるいは無であった水面が不意に水音とともに出現し、蛙の姿を映しだし、蛙の姿が水面下に没すると同時に水紋をその表面に発生させることでその存在を主張するのであるからだ。これがゼロ面と呼ばれるものではないのだろうか。やがて、水音の余韻が消え去ると同時に、著者の内面の蛙、そして水面もゆるやかに消滅する。けれども、それは、確かにたった十七文字という言葉に封印されて「蛙・オン・水面」という作品としてわれわれの手元に残されることで永遠の反復に絶える消費財となる。

常に「見えないもの」を感覚の表面に引きずり出そうとしてきたリヒターの「オイル・オン・フォト」とはまさに、この方法によって、写真の上に塗り重ねられた油絵の具が出現させるゼロ面の体験を前面化する試みだということができるだろう。

一見明晰な「分析」と映るこのような理解は、しかし、リヒターの作品が無条件に感じさせるある種居心地の悪い快感に魅入られ、観切った者のみが到達できるものなのだ。

遠藤　徹（大学言語文化教育研究センター助教授）

ミネルヴァ書房
2,500円

スポーツの法と政策
同志社スポーツ政策フォーラム編

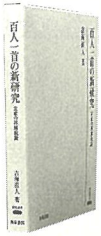
明治時代に欧米から流入したスポーツは、わが国では学校を中心に普及した。他方で、第二次大戦後、スポーツを社名広告や愛社精神育成の手段として受け入れた大企業により、ある種独特のスポーツ事情が形成された。特に競技スポーツが、企業スポーツの中で発展を遂げてきたことは言うまでもない。

しかし近年、スポーツを取り巻く社会環境が激変し、スポーツの位置づけを大きく変えようとしている。大企業を中心に、戦後のスポーツ界をリードしてきた伝統ある運動部がリストラの波にのまれ、廃部、休部の危機にさらされている。一方学生スポーツは、一般学生の嗜好が、上下関係のない同好会系のサークルスポーツへと傾斜し、チャンピオンシップを目指す体育会系クラブの多くが部員不足に悩んでいる。

企業スポーツ、学生スポーツを問わず、わが国のスポーツ事情は、大きな曲り角にきている。これまでスポーツを社会科学の側面から捉えることに、やや立ち後れてきたわが国において、今こそ、スポーツ社会のあるべき姿の研究が強く求められている。

本書はこうした要請に応えるべく、二十一世紀のスポーツ社会の構築に向けた政策提言を展開している。スポーツ行政のあり方、地域密着型のクラブ運営、そしてスポーツ事故処理など山積する課題について、企業政策、社会政策、そして法整備の方向性を説得的かつ具体的に提示するスポーツ界待望の書である。

堀田昌幸（同志社大学硬式野球部OB会長）



和泉書院
8,500円

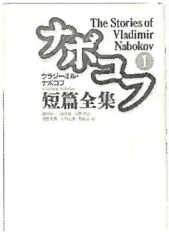
百人一首の新研究
―定家の再解釈論―
吉海直人（女子大学学芸学部教授）著

著者は、すでに『百人一首の新考察』（以下、前書）なる注釈書を上梓している。本書はその増補改訂版で（『百人秀歌』の四首はうれしい）、以下の特色は前書とも共通するが、とにかく『百人一首』をそれ自体として読む、という著者の姿勢はいっそう鮮明になってきた。

本書の特徴は、実に基本的な次の二点へ集約できる。すなわち、和歌本文の厳密なテキストクリティーク、膨大な注釈書類への周到な目配り、の二つである。『百人一首』の和歌はすべて勅撰集に収載されるので、そこでの本文異同には注意がむけられた。だが、それら出典から切り離された『百人一首』内部での流動性から、著者はまともな学問的対象として扱われない競技用カルタの問題点を浮き彫りにする。また、前書刊行以後の新刊を含めた注釈書の可能な限りの調査は、一方で落語に通じる洒落・地口のたぐいにまで及ぶ。近世往来物の解題も手がけた著者は、『百人一首乳母が絵解』のような江戸時代的享受のなかにも、微妙な注釈との接点を見落とさない。こうした基礎作業をないがしろにしたところで、『百人一首』の「研究」が進んできたのである。

かつて『百人一首』の「異本」で成立論議に一石を投じた著者は、前書の跋文において「無益な注釈の縮小再生産」が続くなら「今後は目録屋に徹する」との「覚悟」を述べていた。好忠歌における文法問題を放置していることなど、研究者側の怠慢を指弾する筆鋒も鋭い。

菊地　仁（山形大学教授）



ナボコフ短篇全集Ⅰ

ウラジーミル・ナボコフ著

諫早勇一（大学言語文化教育研究センター教授）**ほか訳**

作品社
3,800円

ナボコフ生誕百年にあたる一九九九年に日本ナボコフ協会が設立された。ロシア語と英語の二言語によって、ともに優劣つけがたい重要度を持つ作品を書いた作家にふさわしい学会として、ロシア文学者と英米文学者の共同研究の場となっている。『ナボコフ短篇全集』は、諫早勇一氏を中心とする七人の露文・英文のナボコフ研究者の協力によって、六十五におよぶ全短篇を新たに翻訳するという意欲的な試みであり、同協会設立の最も大きな成果と言えよう。

第一巻である本書には、初訳十五篇を含む三十五篇の短篇が発表順に収められている。翻訳にあたっては、個々の作品のロシア語版と英語版の両方を参照し、異同に関してどちらをとるかは各翻訳者に委ねられたそうであるが、新訳を既訳と比較すると、ロシア色が鮮明になっている細部が印象に残る。とりわけ最も早い時期に書かれた初訳の数篇からは、若き日のロシア人亡命作家を包んでいた時代の空気が生きいきと感じられるし、時には当時のナボコフのナイーヴさに驚かされる。後に長篇や他の短篇の中で、さまざまな形で再現される主題や場面、小道具のあれこれをこれらの短篇の中に見出すのもナボコフを読む者の大きな楽しみのひとつである。

ナボコフを初めて読む人も長年の愛読者も共に楽しめる上質で魅力的な短篇集である。

（第二巻は七月上旬に出版）

中田晶子（南山短期大学助教授）

『同志社女子大学125年』刊行

本誌は、1877年４月に同志社分校女紅場として開設された同志社女子大学が、今年創立125周年を迎えたことを記念して、豊富な写真・資料をもとに本学創設期から現在にいたる教育の歴史を綴ったものです。

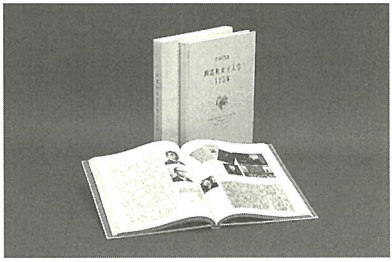
構成：「序章」「同志社女学校の創設」「専門学部への道」「昭和戦時下の同志社女子専門学校」「同志社女子大学の創設」「同志社女子大学の拡充」「京田辺キャンパスへの展開」

版型：Ａ４版　オールカラー280ページ

料金：ハードカバー版　3,000円

　　ソフトカバー版　2,500円

※いずれも送料別。ハードカバーは荷造り材料費210円が別途必要。



申込・問合先：同志社女子大学

今出川キャンパス総務課　TEL：075-251-4112、FAX：075-251-4288